

# 明日香村の文化財を活かした歴史体感プログラム

## －特別史跡石舞台古墳における古代葬送儀礼の再現について－

辰巳 俊輔（明日香村教育委員会文化財課）

### 1. はじめに

#### (1) 明日香村の概要

明日香村は、奈良盆地の南東部に位置する総面積約24km<sup>2</sup>の地方公共団体である。昭和31年（1956）7月に高市郡阪合村、高市村及び飛鳥村の三村が合併して誕生した。

昭和55年（1980）から平成2年（1990）までの国勢調査の対比で微増傾向にあった本村の総人口は、平成7年（1995）から減少に転じている。平成2年から平成27年（2015）の対比では、7,363人から5,523

人へと約25%減少し、平成29年（2017）には過疎地域に指定された。近年では定住促進に関する取り組みを積極的に推進しており、総人口は減少しているものの、その傾向は緩やかになりつつある。

また明日香村は昭和55年5月に制定された明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法（以下、「明日香法」という）により、全村域が歴史的風土特別保存地区に相当する地区として都市計画で定められ、歴史的風土の保存が図られているとともに、住民生活の安定と向上を図るための措置も講じられている。明日香法に基づき、奈良県により明日香村整備計画が策定され、公共施設の整備や文化財の保護、地域振興等に関する事業が展開されている。平成12年度からは明日香村の歴史的風土を創造的に活用していくための支援として、明日香村歴史的風土創造的活用事業交付金が創設された<sup>1)</sup>。この交付金は明日香村の歴史的風土の創造的活用により、学び、体験し、実感できる



図1 石舞台古墳の位置



図2 現在の石舞台古墳

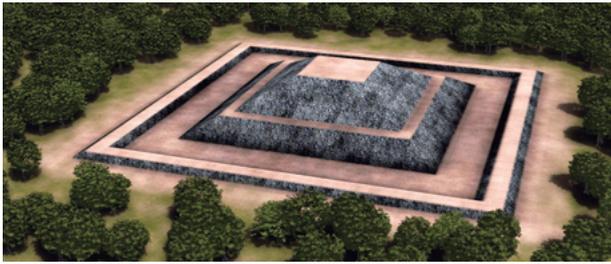


図3 CG復元した石舞台古墳

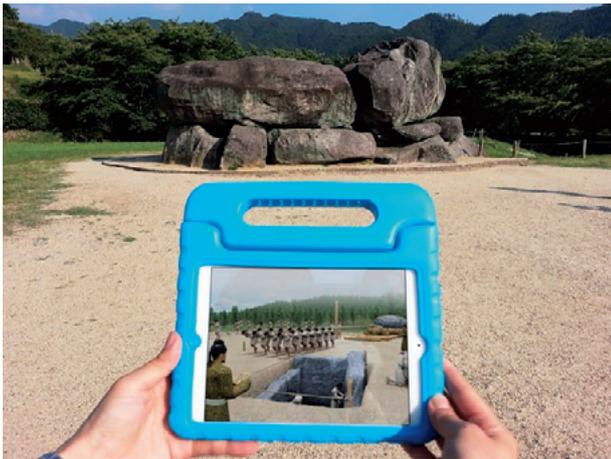


図4 タブレットを用いた理解促進

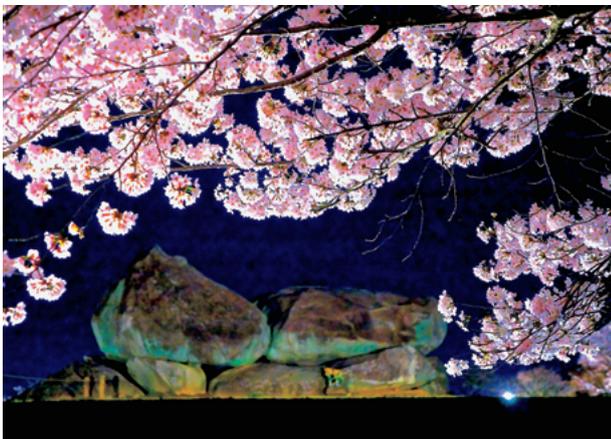


図5 石舞台古墳における夜桜ライトアップ

歴史文化学習の場としての整備を推進するとともに、村の自立性の向上を図るために実施する事業について国が助成することを目的としている。これに基づき、本村では文化財を活用した多様な取り組みを展開している。

## (2) 明日香村における文化財を活用した取り組み

本村では、前述した明日香村歴史的風土創造の活用事業交付金を財源として、文化財に関する事業を

いくつか展開している。特に活用という点に着眼すると、まず史跡のCG復元をあげることができる。東京大学及び関西大学と連携して、石舞台古墳、飛鳥寺跡、飛鳥水落遺跡、飛鳥宮跡、大官大寺跡を映像により復元し、小学校等における社会科の教材として使用するとともに、タブレット等を用いて誰もがわかりやすく現地でも遺跡を理解できる仕組みを構築している<sup>2)</sup>。また、村内における発掘調査の成果を現地説明会だけでなく、埋蔵文化財展示室等において速報展として公開するとともに、親子発掘体験など、多様な世代が見て触れて体験できる環境も整備している。さらに発掘調査成果をはじめとした明日香村の魅力を全国に発信するため、首都圏をはじめとした講演会を毎年複数回実施している。これらに加え、村内の観光施設等と連携して、ライトアップ事業を実施し、文化財が有する魅力の磨き上げも行っている。

## 2. 特別史跡石舞台古墳について

### (1) 発掘調査略史

石舞台古墳は、昭和8年度及び昭和10年度に石室の構造や築造技術の把握、墳丘形態の復元を目的として、京都帝国大学文学部考古学研究室により発掘調査が実施された<sup>3)</sup>。昭和8年度の調査は、石室内部を中心とした調査であり、石室内に堆積した土砂を排出するために軽便軌条を敷設して手押運搬車を導入するとともに、羨道部の崩落石を除くためにチェーンブロックや人力式ウィンチを活用するなど、従来にはない方法を用いたものであった。その結果、石室は両袖式の横穴式石室で全長が19.4mを測ることなどが明らかとなった。また、土師器や須恵器のほか、二上山凝灰岩片も出土し、家形石棺の存在も示唆された。昭和10年度の調査は、墳丘などの外部構造を把握するための調査で、墳丘が一辺約50mの方墳で、周囲に最大幅8.4mの周濠と幅7mの外堤が存在することが判明した。その後、昭和29年度から複数年度にわたって調査が実施され、周濠の様相等が明らかとなった<sup>4)</sup>。さらに昭和50年度に

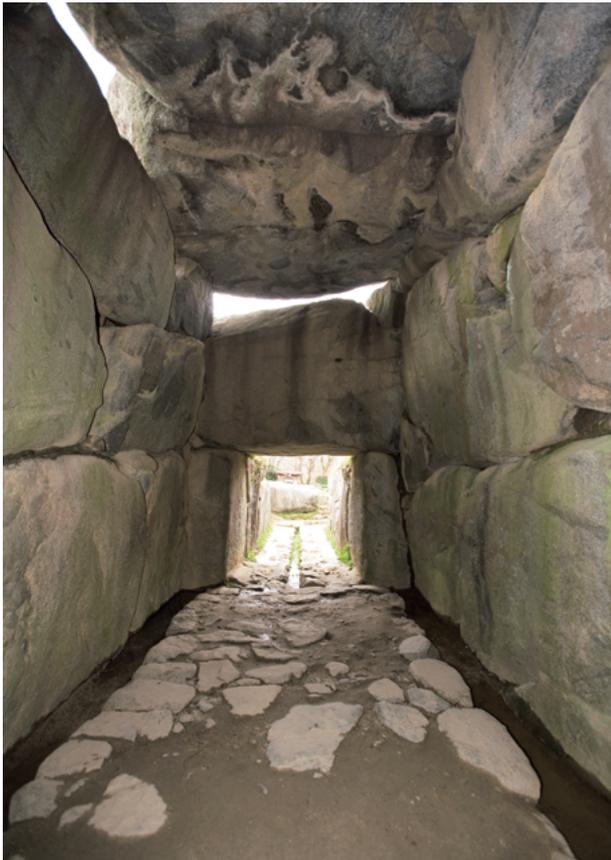


図6 石舞台古墳の石室内

は石舞台古墳の下層やその周辺に小規模な横穴式石室を主体とした古墳が多数点在することも判明した<sup>5)</sup>。なお、昭和10年(1935)12月24日に史跡、昭和27年(1952)3月29日に特別史跡に指定されている。

## (2) 整備状況

昭和8年及び10年度の調査を受けて、周濠南面の修復及び復元が昭和12年度から実施された。その後昭和37年度には県道の付け替え工事が実施され、ほぼ現在の姿に整備された。昭和45年(1970)12月18日には「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」が閣議決定され、飛鳥地方における住民生活の向上を図り、かつ同地方における歴史的風土および文化財の保存・活用に資することを目的として、石舞台古墳を含めた周辺地区に都市計画公園を設置することが決定した。これを受けて昭和46年(1971)7月30日に都市計画が決定され、昭和50年(1975)から整備工事に着手し、昭和51年(1976)9月1日に国営飛鳥歴史公園石舞



図7 国営飛鳥歴史公園石舞台地区

台地区として開園した。

## 3. 明日香村の文化財を活かした歴史体感プログラム事業について

### (1) 事業の概要

本事業は文化庁のリビングヒストリー促進事業の補助を得て、蘇我馬子の桃原墓の蓋然性が高いとされる石舞台古墳において、古墳に埋葬された被葬者の世界観、さらには古代の葬送儀礼を体感することを目的とした旅行商品として造成したプログラムである。蘇我馬子を中心に『日本書紀』等に記載のある推古天皇や蘇我蝦夷、境部摩理勢等の実在したとされる人物に扮する劇団員による寸劇を、当時の葬送儀礼に関連する衣装や石棺等を用いて再現した。葬送儀礼については殯と納棺の場面を設定し、それぞれ劇団員による寸劇を行った。

### (2) 実施に至る経緯

石舞台古墳は明日香村だけではなく、奈良県を代表する観光施設として著名であり、年間を通じて明

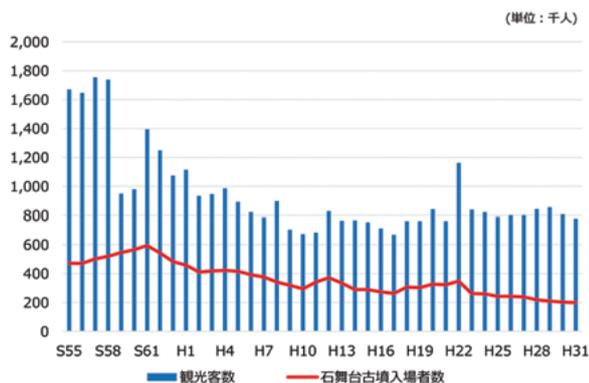


図8 観光客数と石舞台古墳入場者数の推移

日香村内における最多の入場者数を誇っている。しかし入場者数は平成22年度までは30万人を上回っていたものの、近年では20万人前後まで落ち込み、令和元年度は20万人を下回る事となった。これまで石舞台古墳に限定した観光プロモーション等を実施することがなかったことも起因していると想定される。また、本村においては観光客の増加だけでなく、宿泊客の増加に力点を置き、長期滞在に対応するための夜間イベント等の実施を継続して実施しており、石舞台古墳の活用もこれに資するべく新たな活用方法を検討していた。

これらの現状を踏まえ、改めて石舞台古墳の評価を行い、新たな視点から魅力を創出し、本村において重点的に実施すべき夜間イベントに対応するため、葬送儀礼という点に着目して体験プログラムを造成した。

### (3) 実施体制

本事業については、明日香村が主体となって事業全体の統括や物品製作を行い、プログラムの実施を劇団時空に、プロモーションを一般社団法人飛鳥観光協会に委託して実施した。明日香村においては、総合政策課において庁内や発注業務のとりまとめを実施し、文化財課の専門職員が基礎調査や時代考証等を行い、産業づくり課において推敲を重ねて親しみやすいストーリーを作成した。文化財を活用した観光施策であるため、従来の課単位による事業実施ではなく、庁内を横断して全庁的な体制のもと、事

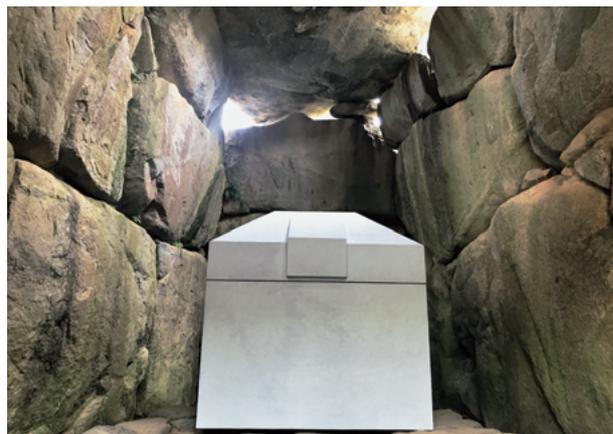


図9 石室内に復元石棺を配置した様子

業を展開した。

### (4) 史実の伝え方

石舞台古墳は、立地や墳丘形態、石室規模等から『日本書紀』推古天皇34年5月条の「大臣薨せぬ。薨りて桃原墓に葬る。」とある「桃原墓」である蓋然性が高いと指摘されている。これに関連する記載として、『日本書紀』舒明天皇即位前紀に「蘇我氏の諸族等悉に集ひて、嶋大臣の為に墓を造りて墓所に次れり。ここに摩理勢臣、墓所の庵を壊ちて、蘇我の田家に退りて、仕えず。」とあり、蘇我馬子の墓を造るために蘇我氏一族が集まっていたが、境部摩理勢が墓所を壊して私有地へ帰り、仕えなかったことが記されている。これにより大臣であった蘇我蝦夷が激怒し、摩理勢を攻め、殺害したとされている。

文献史料に直接記されているのは以上であるため、葬送儀礼の再現には同時期の考古資料の調査成果を援用した。まず石棺については、現在石舞台古墳の外堤上に復元されている石棺復元品の実測を行い、そこで得られた情報に基づいて設計図面の製作を行った。これに基づき、高密度発泡スチロールを用いて芯材を製作し、これにポリエステル樹脂とガラス繊維のFRPを用いて積層させた。FRP表装には石材を模したテクスチャーを均一に設けることとした。そしてウレタン塗料にて、樹脂成型品の彩色を行った。彩色に際しては、石室内から出土している二上山凝灰岩片を参考とした。



図10 誄の再現

次に副葬品については、奈良県斑鳩町に所在する藤ノ木古墳の出土遺物等に基づき、冠、頸飾り、太刀等の復元を行った。葬送儀礼参加者については、同時代史料である中宮寺所蔵の天寿国繡帳を参考にし、男女の衣装を復元した。実際のプログラムにおいて、劇団が用いるシナリオについては、『日本書紀』に記載のある蘇我氏に関連した事象をいくつか抽出し、実在の人物による寸劇を制作した。寸劇については、『日本書紀』に記載されている事項を中心として、息子である蘇我蝦夷が、蘇我馬子の事績を誄として奏上する設定から始めることとした。

誄では、蝦夷が父馬子の事績として、日本最初の本格的伽藍を有する飛鳥寺の創建や厩戸皇子とともに編纂した『天皇記』・『国記』をはじめ、遣隋使の派遣、冠位十二階、十七条憲法に関係したことを奏上し、摩理勢が蘇我氏の繁栄と倭国の興隆に大きく貢献したことを述べ、推古天皇が馬子の功績を称えた。その後の石室での納棺儀礼は、蝦夷や摩理勢、推古天皇らによる納棺儀礼を行った。

#### (5) 課題と今後の展望

古代における葬送儀礼を復元するにあたり、その具体的な内容を伝える文献史料が存在しないため、諸史資料を援用した復元となってしまうことが現状である。しかし飛鳥時代については、それまでと比較して『日本書紀』等の文献史料への記載が積極的に行われているとともに、その内容も比較的信憑性

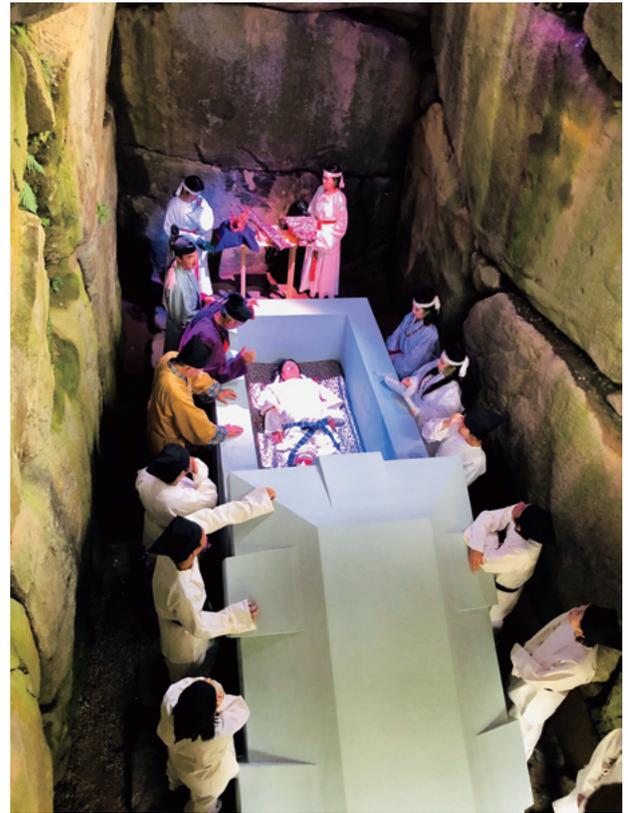


図11 納棺儀礼の再現



図12 納棺儀礼の様子

のあるものといえることから、ある程度までの復元が可能となっている。今回の葬送儀礼についてもこれまでの研究成果の蓄積を踏まえながら、内容について検討を行うことができた。今後は発掘調査等による新たな発見により、さらなる具体的な葬送儀礼が再現できることを期待する。

また、本事業は令和2年3月21日に観光来訪者を対象とした有料の体験プログラムとして実施する予

定をしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための明日香村におけるイベント一斉自粛や文化庁の通知（令和2年2月21日事務連絡）等を勘案して中止とした。それに代わり、令和2年6月28日に関係者によるリハーサルを実施し、将来的な体験プログラムの商品化に向けた調整を行った。今後は新型コロナウイルス感染症の収束を視野に入れ、新たな生活様式に則したプログラムとできるよう検討を実施していくとともに、さらなる内容の充実及び関連物品の製作を行うこととする。

#### 4. おわりに

現在、明日香村では奈良県や橿原市、桜井市と共同で「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界文化遺産一覧表への記載に向けた取り組みを推進している。さらに2025年の日本国際博覧会（大阪・関西万博）の開催も予定されており、今後は国内外からの来訪者が急激に増加することが見込まれる。そのため、本村では豊かな観光資源といえる「遺跡」を村の重要施策の中に積極的に位置付け、それらを用いて宿泊客や観光客の増加を目指し、それら来訪者の満足度向上を図ることを目指している。本事業はその足がかりとできるよう、従来にはない視点からの「遺跡」のとらえ方を行った。今後もそのような視点からの事業展開を積極的に行い、魅力あるむらづくりを推進していく。

#### 【補注および参考文献】

- 1) 明日香村歴史的風土創造的活用事業交付金は平成12～16年度が国1億円、県2,500万円、平成17～21年度が国1.1億円、県2,750万円、平成22年度～令和元年度が国1.5億円、県3,750万円、令和2年度が国1.6億円、県4,000万円となっている。
- 2) 奈良県明日香村・関西大学文学部考古学研究室 2012『石舞台古墳～巨大古墳築造の謎～』、2013『飛鳥寺と飛鳥大仏』、2015『水落遺跡と水時計』、2017『飛鳥宮跡』、2019『天皇の寺 大官大寺』
- 3) 京都帝国大学文学部考古学研究室 1937『大和島庄石舞台の巨石古墳』京都帝国大学文学部考古学研究报告第14冊
- 4) 奈良県教育委員会 1956「特別史跡石舞台古墳復原

工事ともなう調査概報』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯

- 5) 奈良県立橿原考古学研究所 1975『石舞台地区国営公園予定地 石舞台古墳及び周辺の発掘調査概報』